

まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

VOL 55



伊豆 三津浜

## 特 交流と連携をめざすまちづくり 集

—地域資源を活かしたまちづくり—

- 船蔵ギャラリーの誕生
- 染織文化の花咲く町
- 天与の大自然 美川スキー場
- 大きくな〜れ喜左衛門狸も我が町も
- 石鎚ふれあいの里を舞台に 新たな芸術空間の創造を夢見て

## アングル

よりよく生きる……………愛媛県町村会長 弓削町長／木下 良一…………… 1

### (特) 交流と連携をめざすまちづくり (集)

ー地域資源を活かしたまちづくりー

|                                   |                  |    |
|-----------------------------------|------------------|----|
| 船蔵ギャラリーの誕生……………                   | 三 崎 町／塩崎 満雄…………… | 2  |
| 染織文化の花咲く町……………                    | 野 村 町／藤本 一三…………… | 4  |
| 天与の大自然 美川スキー場……………                | 美 川 村／天野 秋一…………… | 6  |
| 大きな一れ喜左衛門狸も我が町も……………              | 東 予 市／徳田 紀男…………… | 8  |
| 石鎚ふれあいの里を舞台に 新たなる芸術空間の創造を夢見て…………… | 西 条 市／神野 顯彰…………… | 10 |

### 論談ーまちづくりー

具体的な動きの支援から……………(財) 地域振興研究所／谷本 亘…………… 12

### キラリ光るまち

日本一元気な村づくりを目指して…………… 京都府大宮町／川口 勝彦…………… 14

### リレーでちょっとク

街の姿は心のかたち……………松 山 市／池之上卓治…………… 16

思うこと……………松 山 市／野本 文枝…………… 17

### まちづくりグループ紹介

篠山クラブ……………一本松町／田中 俊二…………… 18

### 風おこしのちかい

チャレンジ精神で……………玉 川 町／井出サツミ…………… 20

### 研究員レポート

えっ! 紙でこいのぼり?…………… 稲田 紹…………… 22

地域に生きるということ…………… 藤田 享…………… 24

### MY TOWN うおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス…………… 岡崎 直司…………… 26

### Information

媛のくにフラッシュ 〈波方町・御荘町〉…………… 28

まちセンからのお知らせ…………… 29

## 特集「交流と連携をめざすまちづくり」

### 今号のテーマ

地域資源を活かした  
まちづくり

今年度は、交流と連携をめざすまちづくりをメインテーマに、特集を組んできました。

地域住民が、自分たちの地域を見直し、アイデンティティ(個性)をつくりあげていく、そこから交流が生まれ、やがて連携へとつながっていきます。

地域の個性、そのまち、そのむらにしかないオリジナリティ、その基礎となるのが地域資源だと思っています。

そこで、今号では、地域資源にスポットをあててみました。

一口に地域資源と言っても、色んなものがあり、歴史遺産、芸術、文化、森林、河川、自然景観など、さまざまです。

それぞれの地域固有の資源を見つけ出し、それにいかに付加価値をつけるか、輝かせるためには、当然そこに地域の人の関わりが必要でしょう。

(編集子 伊手)

## 表紙の言葉

歌に詞まれた松原の  
続く、田子の浦から伊  
豆の三津浜へ。伊予の  
三津浜と同じ字でミト  
ハマと読む。

十一月というのにポ  
カポカ陽気、晴天が続  
く。お陰で富士山がず  
っと見られ、心の奥ま  
でリフレッシュ。

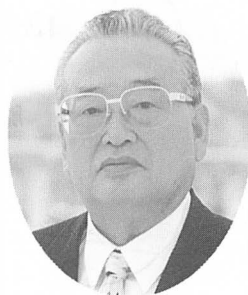
港には、次々とイカ  
釣り船が帰ってくる。  
そう言えば、沼津で食  
べた寿司ネタは、浜に  
近く最高の味でした。

柳原 あや子



愛媛県町村会長

弓削町長 木下 良一



昭和六十年頃であったか、行政改革が論じられていた時、町内の会合で「弓削町の行革は」との問いに「職員研修、職員の質と能力を高めること」と答えた。

何事においても、基本となるのは、人であるとの考えに基づくものであり、町長就任以来、このことを強く意識して、

自分のことは、自分でする

してもらう、してやるでなく、「する」

という姿勢が大切であると提唱し、町政に反映させるべく努めてきた。

然し、現実には、残念ながら、年月とともに、私の願う方向から、段々と離れてゆくような感じがしてならない。

何かあるとよく言われるのは「お前が、よく教えないからだ」であるが、それに対しては「役所は、学校ではなく、私は、教師ではない。自ら習い学ぶ努力をしない者に教えるには、授業料が必要」と答えることにしている。

このことは、折にふれて職員にも直接口にする。

自分自身の不明と不見識を恥じるところもあるが、今も、その気持ちは変わらない。

教育とか訓練とかいうと、どうしても、自分の育った時代をダブらせてしまう。時代の変遷を思い、現在のむつか

しさに反省もあるが、やはり、あの時代のあり方や考え方が、よりまっとうなように思えるのも事実である。

最近、気にかかるのは、自己責任の自覚と、

個を優先し、世の為、人の為という公共心が希薄であり、そして、もてる力を発揮する

ことに消極的であると思われることである。

これは、現在の社会が、何事についても、性急に「答え」を求め、目まぐるしい環境にあつて、あまりにもあわただしいことによるのではないか。そのために、遊び心を忘れて、全てに余裕を失っているからではないか、と思われるところがある。

遊び心とは、何でも知ってやろう、見てやろう、調べてやろうという、つまり好奇心である。

仕事の中に持ち込めば、もっと楽しいものになるだろう

し、出張等は、学ぶ、楽しむ対象が多くあることに気づくのではないだろうか。

「よく学び、よく遊び」は、日頃から心がけている好きな言葉であるが、これに「よく働き」を加えて、学・働・遊にしたい、するべきだと思っている。

ある人の人物評論の基準に、高淡泊 卑しくないこと

高感度 あらゆることに興味をもつ

高安定 決めたら絶対にグラグラしない

とあるが、心を打たれるものがある。

どうしたら「よりよく生きれるか」特に、自分自身に問いかけている昨今である。

## 『船蔵ギャラリーの誕生』

船蔵ギャラリー応援団

三崎町役場産業課長

塩崎 満雄

### 地域資源としての船蔵

思い起こすと十年前の秋、松山の友人が石垣の探索に訪れた時だった。

三崎から石垣群のある井野浦に向かう途中、「車を止めてや」と友人の声。突然の声に驚き、「何か忘れ物ですか」と



車を急停止したが、何も言わずに車から降りて、辺りをじっと眺めている。

「この建物は何ですか。何に使っているのですか。」矢継ぎ早に問いかけてくる彼の目は、子供が宝物を見つけたその目であった。

彼は、「どんな廃れた集落でも、人も資源も探せば必ずある」と、私に教えてくれた、ジァース編集局長の忽那氏である。

三年前に帰らぬ人となったが、「塩崎君、この建物はいいよ、僕の友人に建築家がいるから、紹介しようか。」と、船蔵風景を絶賛した一人であった。私には見慣れている建物で、昭和二十年代までは時代化のときに伝馬船を開う施設で、

海辺でしかも季節風に耐える

ために、軒下が一定方向に向き、瓦が飛ばないように青石が漆喰がわりに載せられている、田舎では当たり前の建物として見ていることから、地域資源として感じる風景でも

なかったが、彼の視点を変えたものの見方（地域独特の生活の知恵）の話を聞くと「地域資源の掘り起こし」が理解できた一例で感銘させられた。

その後、松山工業高校の犬伏・高須賀両先生が当地区の調査・研究に訪れ、それぞれの文獻に記したが、地域の反応は微風で、文化に対する農漁村民の関心の薄さと、自分自身の守備範囲の狭さにジレンマにかなり途方に暮れていた。

ところが、昨春、船蔵界隈が慌ただしくなっているとの井戸端情報があり、船蔵利用が

話題となっていた。

「何か店屋ができるの」と「こんな田舎に、客があることない」「農業がいやで、世も知れんことを」などと。

### 勇気ある決断は町を活かす

船蔵を提供した大星氏から昨秋の十月一日オープンに、開設の案内をいただき、彼の



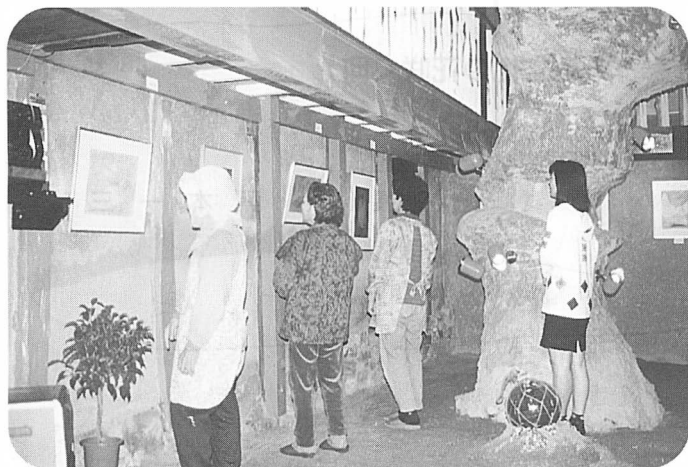
改造された船蔵・伝馬船が来客を歓迎



本音を聞くことができた。

「地域づくりは文化を基調とした活動が本流です。先人たちが築いた資源を活かそう」と、九州から参画しているアーティストの皆さんに勧められ、決断するまでの苦労話や悩みを聞かされたとき、実現への行動は素晴らしい勇気、と感激しました。

ギャラリーの内容の善し悪



近所のおばちゃん達が野良仕事の合間に訪れる

井戸端情報で賑わいだ人々も一カ月程経つと、不思議なまなざしでギャラリーを訪れて、「この絵は……」「この彫り物は……」と井戸端評論をしていたとか。

将来の展望は誰も知ることはできないが、絵画や彫刻に触れ、芸術に親しむことが、直接できる大切さを訴える施設に取り組んだ船蔵ギャラリーに、大きな拍手を送るとともに、私たち「さがけ橋

しは素人の私には解らないが、雑然としていた周辺がそれらしく整理されたり、隣のおじさん、おばさんが芸術の話に立ち止まったり、近所のおじいちゃん、おばあちゃんが、腰を曲げながら拝観している光景をみると、その波及効果は至るところに現れていると驚かされました。

井戸端情報で賑わいだ人々も一カ月程経つと、不思議なまなざしでギャラリーを訪れて、「この絵は……」「この彫り物は……」と井戸端評論をして



改造された船蔵・オブジェが変革を示す

守る一方、青い石積の公園を一日でも早く完成させ、地域の連携を図りたい。

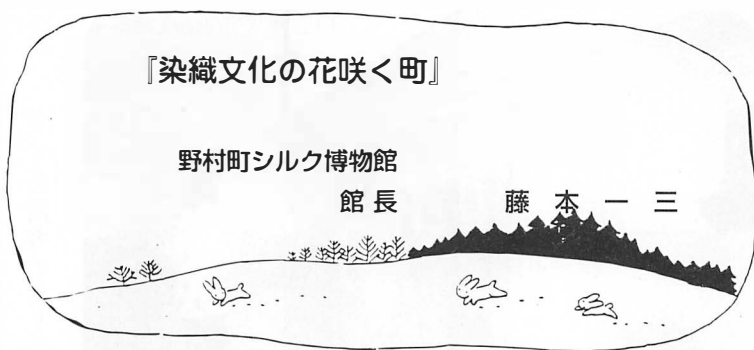
そうして、探せばまだまだある「地域資源と人材」、終着駅のないまちづくりに勇気ある決断を持って人生を謳歌し「ふるさと孝行」がしたい。

「なぜ山に登るか、山があるから」、登山家が山に望むように、地域に生きる私たちも「そこに古里があるから」。

「古里と親とをはかりに  
かける馬鹿な奴」



改造された船蔵・周辺も整理され効果がでている



したくてまちセンに足を運んでいた頃が思い出された。



未だに、町づくりの答えをもたないまま取り組んできた「染織文化の町づくり」を紹介し、皆さんのご批判をいただくために、原稿依頼を受けることとした。

## シルクと野村町

かつて野村町は「シルクとミルクの町」と称してきたように、蚕糸業と酪農が盛んに行われていた。

特にシルクは、明治初期に始まり畑作地帯の野村町では、明治二十年頃には養蚕専業農家が数戸できる程に急速に普及し、大正初期には養蚕農家

数一、〇三〇戸、機械製糸工場六社、その従業員五〇〇人以上のほか、個人経営の小規模な製糸工場が多数あったと言います。

この頃の野村町は、桑畑の中に町があり、町民の殆どが何らかのかたちで、蚕糸業にかかわって生きていたようです。

昭和初期の恐慌で町内の製糸工場が全滅し、養蚕農家は繭の売先が無くなってしまったため、養蚕農家の悲願であった組合製糸工場を養蚕農家の出資で建設し、工場長をグンゼからヘッドハンティングし、昭和十一年から製糸を開始しました。

野村工場で生産する「伊予糸カメリヤ」は、皇室儀式の衣冠束帯や伊勢神宮のご料糸に使用される等、皇室ご用達生糸として全国に知られるようになりました。

戦後もいちはやく蚕糸業は復興されたが、五十年代に入ると繭の国際化が始まり、韓

国、中国の安い繭が輸入され、我が国の蚕糸業が急速に衰退したように、野村町の蚕糸業も、養蚕農家数、生産量共に急速に減少し、野村町から養蚕が無くなる運命にありました。

## シルク博物館

明治以降、野村町の基幹産業として、町の近代化を支えてきた蚕糸業を後世に伝えようと、シルク博物館建設計画が持ち上がった。

シルク博物館は、美しい展示、動く博物館つまり展示品が動く、人が動く博物館をコンセプトに、年四回の特別企画展を継続し、地域の生活文化で町内に埋もれていた田舎歌舞伎衣装や藍染の型紙一、四〇〇枚の発掘も行っています。

シルク博物館に併設している絹素材研究所では、養蚕農家の経営安定を図るため、少量多品種養蚕を目指した特殊品種、特殊生糸の開発と、そ

## まちづくりとは何か

この原稿依頼があったとき地域づくり研究会議の設立準備委員会を、県内各地を持ち回りしながら、まちづくりとは何か、地域づくりとは何かを議論しあったり、地域づくりに燃えている人たちと話が



糸をつむぐ織姫たち

また、絹織物館では、全国に公募した織姫（九名）と町内の織物受講者が、町内の繭から糸を紡ぎ、染色、手織で織上げるまでを一年間かけて学習しています。

ところで、自治体のミュージアムでは、何人の入館者があったかを評価基準と考える傾向がありますが、私は何人ではなく、誰が来たかを重要視していきたいと考えております。

シルク、それも本物のシルクに徹底的にこだわって、本物の絹織物づくりに取り組んでいる事を理解する人が、何人訪ねてくるかを大切に、一般の人々には美しい織物に感動していただける博物館でありたいと願っています。

このことが、糸づくりでは日本一の志村先生を迎えることになり、染色の吉岡先生、シルク博物館顧問の吉田先生など、我が国では一流の人々に関わっていただくことにつながっています。

## 染織文化の町づくり

町内で半年生活した織姫達も、「あんた、織姫で来た人かな」「どこから来たんな？」

「大阪、そうかな、織物は面白いかな」

「細かい仕事じゃけん、なかなかよな」

などと、町民との会話が聞けるようになり、織姫達と野村町は、真白な絹糸で永久に結ばれ、織姫講座の続くかぎり、織姫の輪は広がっていく、これこそ都市と農村の交流だと考えております。

シルクにこだわってきた結果、単に資料を収蔵展示するだけの博物館から、実践的な絹素材の研究、研修生への染織教育、都市と農村の交流、産業振興をも事業とする、染織文

化に根ざした、地域活性化が始まっています。

その中心はシルク博物館であり、シルク博物館のグレイドアップが、染織文化の花を大きく咲かせることになるでしょう。



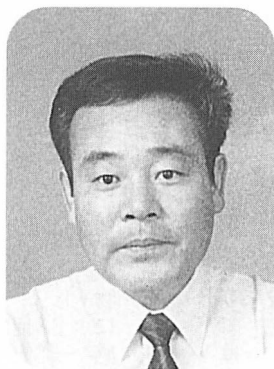
絹織物館

# 『天与の大自然 美川スキー場』

美川村役場企画観光課長 天 野 秋 一



鉄バス・愛媛新聞社・愛媛県スキー連盟・地元の大谷地区の協力によって、南国スキー場として産声をあげることになった。



昭和三十五年 スキー場開発開始

昭和三十六年 国鉄スキーバス定期季節便運行開始

昭和四十年 第一リフト架設  
六一三メートル

昭和四十三年 第二駐車場完成  
昭和五十五年 第二リフト架設  
三〇一メートル

昭和五十六年 一、〇〇〇台収容駐車場完成

昭和五十七年 第三リフト架設  
三三三メートル

昭和六十年 宿泊施設白銀荘完成  
八十六名宿泊可能

昭和六十一年 圧雪車購入  
昭和六十三年 人工降雪機四台購入（モミの木コース）  
第五リフト架設一二五メートル

平成二年 高松の宮杯第三十二回西日本スキー競技大会

平成四年 人工降雪機八台購入（スカイラインコース）

平成五年 第一リフト架設替

六一七メートル、人工降雪配水管布設（ファミリーコース）

ース）

以上のように、スキーヤーのニーズに対応した開発を行ない、九つのコース、リフト四基、人工降雪機十二台を有する、初級者から上級者まで楽しめる四国随一を誇るスキー場となり、自然雪不足にもかかわらず、年間六万人を越すスキーヤーでにぎわっている。

また、特筆すべきは、平成二年一月に四国で初めて、三笠宮さまをお迎えして、「高松の宮杯」第三十二回西日本ス

キー競技大会を、京都以西二十三府県の参加を受け、盛大に開催したことである。

このように、多くの人々の協力でスキーヤーに喜ばれるスキー場になるよう施設整備に努力をして来た平成元年に、開設以来三十年を経過したのを機に、開設を記念した記念碑を白銀荘前に建立し、スキー場の歴史の大きな節目を刻んでいる。



白銀の美川スキー場全景

## 美川スキー場の歩み

県立自然公園四国カルストの中で特異な存在として知られているのが美川スキー場である。昭和三十五年に過疎対策の一環として、天から与えられた大自然を保護し活用する事を考え、愛媛山岳会・国





第1リフトはやはり美川の顔

## 岩城小学校との

### スキー交流学習

村の取組みとして、昭和五十九年から越智郡の島、岩城小学校と美川村の小学校六年生が交流学習を行ない、平成九年の冬で第十三回を数えている。冬は美川の児童がお手本となり、事前に手紙等で交流をしている為すぐに仲良くなり、スキ一の腕前も上手になり、ゲレンデの雪の輝きに感激しているようである。

又夏は、美川村の児童が岩城村に行き、美川村で出来ない海水浴、地引き網、とれたての魚のバーベキュー、クルージングと、岩城村の夏の楽しさを満喫している。

学校を出てからも文通その他で交流を行っており、これ又大自然の恵みの産物と言えるだろう。

これからも都市と農山村との温かい交流ができ、過疎化するわが村の活性化の一翼を担うスキー場でありたいものである。

### 四季を通じての大自然の活用

前記したように冬の観光地としては、徐々にではあるが定着しつつある。しかしながら四季を通じての観光地とする為に、与えられた大自然をもっともつと活用してゆく必要があると思う。

春は、新緑。この大川嶺一帯は学者によると、高山植物の宝庫と言われており、その高山植物の観察、又嶺一帯に

群生している「トサノミツバツツジ」の深紅は周囲の緑に映えて美しい景観を呈している。この利用が考えられる。

夏は、国営草地改良事業で整備された、一二五ヘクタールの広大な牧場で二〇〇頭余りの放牧牛とのふれあい、又納涼、

絶好のキャンプ場としての利用も可能です。谷のせせらぎと、小鳥のさえずりに耳をすまし、雲海を見下ろしながら日の出を拝み、また夕やみせまる頃の石鎚山の勇姿を望み、一夜を過すと心のもやもやも大川嶺の風に吹き飛び、すがすがしい気持ちになるものと思われ。

秋には、天然のブナ林を中心とす

る紅葉の観賞と、冬のスキーと四季を通じての、ふれあいと交流の満喫出来る広域観光の拠点として、天与の大自然をやさしく保護し活用をしてゆく方法を模索中の昨今である。

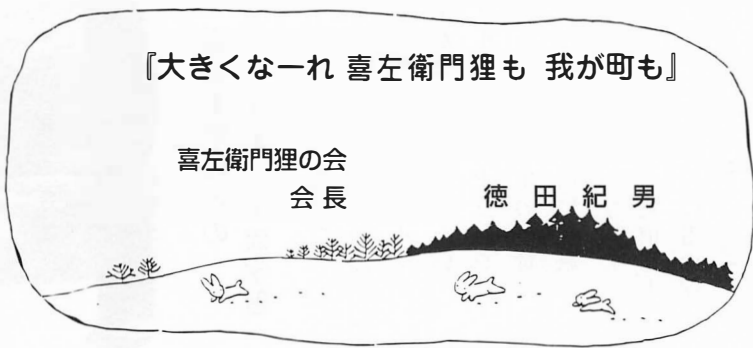


岩城村との交流スキー教室

## 『大きくなれ 喜左衛門狸も 我が町も』

喜左衛門狸の会  
会長

徳田 紀男



### 喜左衛門狸の復活

私が喜左衛門狸の復活を思いついたのは、非常に単純な動機でした。近所の小学校付近が調整地域の為、住宅が建たなく、子供が異常と思うほど少なくなったことでした。しかし、素人の私達には解決

出来る手掛かりなどないと、諦めムードが漂っていました。



そんな中、ふと思いついたのが、学校の近くにあるおきみ大気味神社の民話で名を轟かせた狸に蘇ってもらい、神社に大型バスを乗り入れれば付近の道路が大きくなる、そして、両サイドにサービシ業が出来れば、住宅地として開発許可が戴ける、それくらいな軽い気持ちでした。

喜左衛門狸の話というのは、『江戸の昔、大気味神社の境内に数百年を経た大きい木があり、その木の洞穴に喜左衛門と名のる狸が住んでいました。変幻自在の神通力をもって四国狸大番付では、阿波の金長狸と並ぶ西の正横綱でした。』

あるとき、屋島のはげ狸と化かし競べをし、紀州の殿様の行列に化けると言って本物の行列を見せたところ、はげ狸は、「喜左よく化けたぞ」とお籠のそばに近寄って、おつきの侍に切り殺されてしまったという事です。そのうち悪戯がすぎて瓦師の窯に投げ込まれ焼き殺されてしまいました。ところがその後、悪病がはやったり、盗人が入ったり様々な被害が出て、里人はこれは喜左衛門狸のタタリと恐れ、大気味神社のお使いとしてお祭りしました。」というものです。

幸いにも商工会議所青年部の首藤氏による喜左衛門参上のテーマソングが出来上がり、平成九年一月には喜左衛門踊りを当市出身の一世先生によって振り付けて戴き、この踊りを東予踊りへと育てる為、会員はじめ子供さんや主婦の助けを借り、思わぬ早さで広がっています。

文面は前後しますが、三年

前には狸のキャラクターも公募し、現在では、ステッカーとして多くの自動車に張ってもらい、いろんな人に知って戴く努力もしています。



### 夢は大きく

ここまで来るのには、沢山の団体や市民の皆様、そして行政の方々やマスコミの方々から数知れない助けがありました。

しかし、この活動自体は、街全体では点でしか無い事に気付き、同じ考えなら大きく、自分の街の四国全体の位置と愛媛の位置、又関西を含めた中国地方のどんな位置にあり、何をすればと飛躍してしまい、喜左衛門狸も大きく育てなければならなくなってしまうした。



私達の東予地域は、平成十一年の高規格道路の開通により、日本海から太平洋まで今まで考えられないほど短時間で来られるようになります。広島、岡山、高知、徳島、高松いずれも車で二時間程、海上は大阪行フェリーが三便、貨物の流通にも最適と交通のアクセスはあまり心配ないところです。

土産物や食物は東予の運動公園付近を少し開発して、近くの漁港から揚がる瀬戸内の魚介類を販売し、一方では、魚料理として訪れる人に食の喜びを味わって頂き、又野外ステージでは、県内外の素人、プロを問わない演芸とあまり資金をかけない整備をお願いして、田舎の素朴さを充分味わえる場の提供を



観念寺

心掛けなければダメだと思います。

基本としては、郷土にある素晴らしい自然を真剣に見直すことです。

東予市には、東に干潟のある県下では一番の海岸や、未開発だけど永納山遺跡、国民休暇村のホテルと温泉、世田薬師付近の古墳郡、二百六十年以上経った観念寺、隣の丹原町の西山興隆寺、中山川溪谷、小松町の八十八ヶ所寺やハイウェイオアシスと四国最

高峰石鎚山、どこをとっても胸を張って訪れる人に言えると思います。まちづくりには、先ず自分のまちに自信を持つことから始めなければならなと思います。

一つの案としては、朝広島から出た観光バスが、日本で一番美しい島々の観光と海の幸を味わいながら今治市に入り、糸山からの瀬戸内を眺め、タオル工場の見学、夕方には湯の浦のホテルでの宿泊、二

日目は東予市、丹原、小松、西条で日本一の美しい水とその水から生まれるビール工場の見学、新居浜の科学博物館、マイントピア別子、川之江の製紙業界の見学をして香川県へ入り、瀬戸大橋から瀬戸内海をみながら岡山へ、倉敷の町並みをみて山陽道を一路広島へ帰るコース、逆に、岡山から出たバスは、これと反対に回るコースが考えられます。

日帰り観光には、車で約二時間程度の場所が良いと

されております。その条件には私達の住んでいる所が絶好の所であるはずですが、自分の町を非難しても、誇らしげに言っている人には会った試しがありません。

今後アピールする時代を肌で感じて、せめて今治から坂出を面として、行政の枠を超えた考えを持つ研究会を、当地が音頭をとる等して、立ち上がって戴きたいものです。



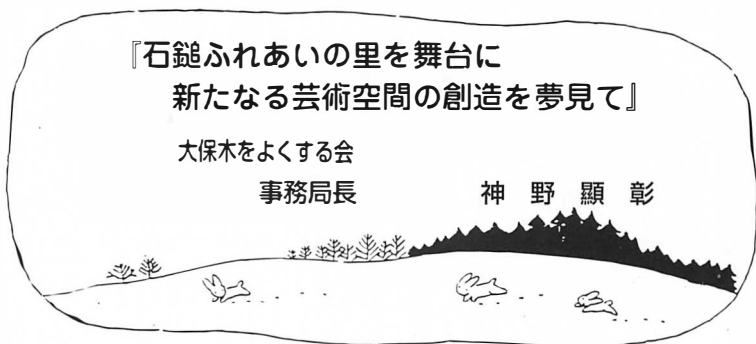
休暇村から東予市をのぞむ

# 『石鎚ふれあいの里を舞台に 新たな芸術空間の創造を夢見て』

大保木をよくする会

事務局長

神 野 顯 彰



## 石鎚ふれあいの里と 大保木をよくする会

石鎚ふれあいの里は、西条市の水の源流、石鎚山の山間にある。ふるさと創生事業の一環として平成二年にオープンした施設で、その内容は廃校となった小学校を活用した

もので、宿泊、食事、キャンプ等の自然体験、野外学習の場として設立されたものである。



「大保木をよくする会」は、この事業の計画時より発足し、事業運営を地域側から支え、活性化に導く目的にて活動している。

その活動は食堂、バーベキューハウスの経営、清掃等の委託業務を推進すると共に、春は山菜祭り、夏はジャズミートニング、秋にはアウトドアミーティング等々様々な催し物を開催し、より多くの人々に当施設の利用促進及びそれらを通じて生まれようとする新たな力を地域に定着させようとするものである。

これらの活動は、行政各組織はもとより、市内外の企業、ボランティア団体や様々な人々のご支援、ご協賛を頂き展開してきた。

しかしながら、その労、未だ花開かずの思いが、地域住民の現実であるように思われる。もとより地域づくりは、永遠のテーマであり、継続と人づくりが欠かせぬ課題と認識しつつも……。

その原因としては、次にあげられる事項に集約されるものと思う。

① 地域住民の高齢化。（発足時より七年経過しその協力、支援を期待できない状況下となる。）

② この地域で核となる指針とそれを支える経済及び人的体制の継続が望めない。

③ 地域活性化の必要意識の低下。（あきらめムードと社会状況の衰退と混乱現象

…この事は、人と人との連携や交流に影響す。）  
今後の課題は、これらの事

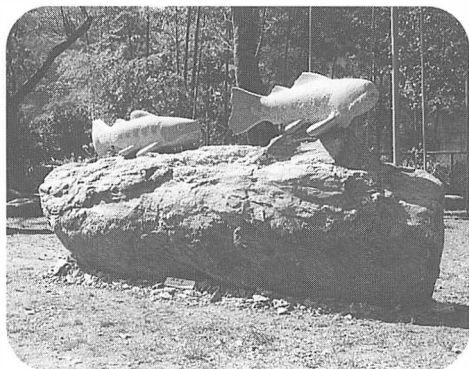
項を一つずつ解決して行くための模索と交流、そして連携と考えるものであるが、それらを支えていく人的資源、経済的背景が無ければ、至難のことであろう。なぜならばボランティア的活動の継続は不可能と認識するからである。

その上で私共は、今日までの七年間の活動の中で様々な団体や人々との交流を通じ、お互いの価値観や生き方に共鳴できるところから、それぞれの立場で負荷を掛けあうこと



「石鎚アーティスト・ミーティング'97」参加のアーティスト達

「水の音」  
宮窪町 宮内 宏氏作品



のないネットワークを構築すること、先ずもって行いたいと思うものである。

# アーティスト・ミーティング'97

この度、実行委員会を組織し、開催した『石鎚

アーティスト・ミー

ティング'97』は、こ

の地域に現在定住し

ている大道芸人Nさ

んから越智郡宮窪町

にアトリエを持つ石

の彫刻家Mさんを紹

介されたときより始

そしてさる十月五日から十

一月九日（日）迄の約一カ月

間、友人であるインド、韓国

の石の彫刻家をはじめ国内各

地で活動をしている彫刻家や、

音楽家、舞踏家そして、西条

市内にて活動している陶芸家

や木の創作家たちにより、地

元産出の青石を素材とした

「石と水」をテーマとする石の

彫刻の公開制作及び展示会そ

して、川原で繰り広げられた

音楽や舞踏やモダンダンス等

と多彩に繰り広げられた。

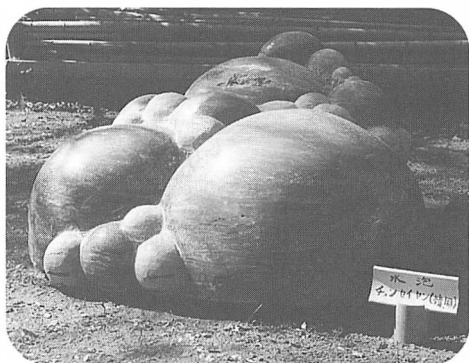
彼等は公民館の施設に住込

み、自炊をしながら地域住民

と積極的に関わり、秋祭りや

地域の運動会等にも参加し、

「水泡」  
韓国 チョン・セイ・ヤン氏作品



また地域住民や子供達も楽しく彼等と交流するのを多く見ることができた。

又、最終日の十一月九日

（日）には、第七回目となった

『97アウトドア・ミーティン

グ・イン石鎚』を同時に開催

し、午前中は、ウォーキング

大会、そして午後はカラオケ

大会と大いに盛り上がり、特

に、カラオケ大会は、地域住

民及び地域出身の方が中心に

なり、大いにご協力して頂いたことは、実に有り難かった。

この度の催しは、今後の私

共にとつて、何をしていけば

いいのか大いに考えさせてくれる力となった。

それは、この地域の自然や

人情、そして、文化を愛する

心。又、人としての生き方に

一つの方向性をもっているも

のとの、交流と連携によって

こそ、素晴らしい芸術空間や

文化そして、地域づくりが構

築できることではなからうか

という事である。

来る二十一世紀の人々の人

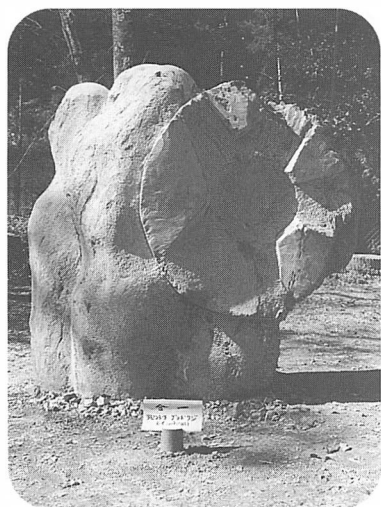
生観は多分その事を求めて、

深い満足感のあるものへと移

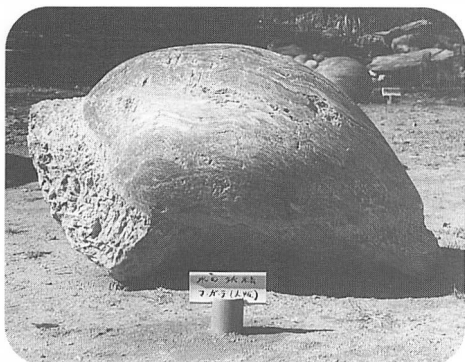
行していくことと確信するも

のでもある。

「合一」  
インド ラビンドラー氏作品



「水の妖精」  
大阪在住 真柄氏作品





## 具体的な動きの支援から

(財)地域振興研究所 (石川県)  
谷 本 亘



### 一、実践と理念

地域づくり、まちづくり、

活性化など、名称は何でもいいが、私は枠組みを決めて、これらを目的にしていこうことはあまりおもしろくない。

ただストイックに修行のよう考えるのもどうだろうか。やっている人が考え、行動して、実践していく中でやりがい、いきがいを思いだしてもうええよいのだろう。

あくまで地域活性化とは「結果」であり、過程は「楽しむ」もので、そしてそれは具体的な実践の中からでてくるものだと思う。

どちらかといえば、演繹的な考え方であり、それは地方で活動している人にその方向が当てはまる。都市では情報が集まるものの、実践が身近にないのでどうしても一般化して考えようとする、帰納法的な思考であり、実践からは遊離してしまう。

枠組み、理念先行が悪いということではないが、ただど



実践活動の構想はゆっくり考える  
(白馬・カスケ山荘にて)

こでも当てはまる理念は教科書のようなものであって、それを地方でどのように解釈して取り入れていくのかということである。枠組み通りにする必要はなく、したたかに、改変してあるいは曲げて理解しながら地方版を検討すればよい。

さらにこれも具体的なものの積み重ね、実践の末にでてきたものであるべきである。もちろん、前記している考え方もそういう具体的な活動か

ら抽象化、一般化されたものだが、いつしか「地」を離れていつているような気がしてならない。

### 二、共同作業と継承

ひとりの人がプロジェクトにかける情熱やパワーがあればなんにもかも解決していくという時代ではない。まちづくりの中心的な役割を担っていた著名な人はいつしか次の代にかわり、さらに中心となつた人そのものが疎んじられる状況もでてきている。人が一人で引張っていくことは難しく、またついて来ないのである。集団での指導体制、みんなでひっぱっていく体制への移行である。

スターを輩出すればその人とともに地域も有名になる、また、その人をめがけて会いに来るといふ現象が繰り返された。それはそれで良かったが、後が続かない。継続する

ためには順送りに物事を世代を越えて伝えていかなければならない。地域づくり第一世代の人たちが苦勞しているところもそこである。しかし、そこには自分たちの思いや実践をモデルにして押しつけ、さらに少しでもできないと、これはだめだとばかりに非難していかないだろうか。継承する世代にはそれなりのやり方があり、それは認めておかねばならないのではないか。

スターとなる人は自らの資質の上に様々な情報もたらされて、より洗練された理論構築ができるようになる。しかし、そこからスターとなった人と地域で活動する人達の情報格差が徐々に広がる。それは例えば、ある施設を管理する場合に高度なサービスを要求し、理想を追求する人に下の人がついていけなくなることによって表されている。

### 三、都市圏とのつきあい方

都市も地方も一つである。

都市の人も元地方の人である。東京に限ればかなりの人が関東甲信越、東北地方の出身者の子孫である。

ただ、東京発の情報いや東京を経由して大きくなって地方に跳ね返される情報が多いために、いきおい地方は都市、この場合象徴としての東京に依存してしまう。

一般的、特殊を問わず都市にはそれを求める人の人口規模がとて大きい。地方では一人でも東京なら五人や十人集まる趣味の会も多い。だから、仲間や消費者、利用者を供給する源として都市は大切だ。さらに、家と車をあきらめると意外なほど可処分所得は大きい。

情報はインターネットでもわかる通りとりあえず都市を通す必要のないメディアがどんどん発達している。テレビ局と雑誌を除くといま東京、大阪を経由する必要はない。ましてや人と人とのつながりは、東京、大阪も一つの地方

だと考えれば地方同士の結びつきの方が早く、正確である。

都市を機能的にかつ必要に応じて利用することができないうと、いつまでも地方の自立などあり得ない。いいところは評価して積極的につきあうことであり、一方でできることは、可能な限り都市に依存しないで言う姿勢を貫くことである。

### 四、地方同士が連携する

地方同士の連携は端で見ると、ほどう易しくはない。むしろ、隣の県同士でも仲介に東京を経由しないとまとまらないことも多い。都市と地方との交流、連携したプロジェクトは盛んで成功しているところも多いが、地方同士は妙にライバルだったりして意外と難しい。

我々は日本海側の諸県をつないで列車を走らせ、それを交流の起爆剤に使うことを考えた。間をつなぐものは酒と肴である。酒は飲まない人を

除けばこれほど人がよりやすいものも少ない。

酒はコミュニケーションメディアであり、場を和やかにして話をしやすくする。酒を飲むことは酔うための目的でないとするれば、酒とは非常に機能的な飲み物である。酒に飲まれず酒を利用して、共同の事業を行いさらにそれをきっかけに次の展開を模索する。

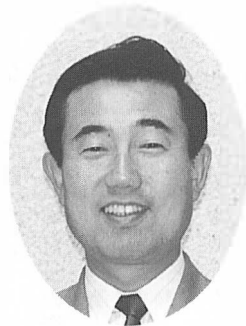


地酒列車：JR高岡駅頭で関係7県のメンバー

# キラリ光るまち

日本一元気な村づくりを目指して

京都府大宮町役場 川口 勝彦



大宮町は、京都府の北部丹後半島の玄関口に位置し、周りを大江山連峰をはじめとする山々に囲まれています。日本海まではわずか十五キロと自然に恵まれた農村です。春の山菜、秋の松茸、冬のカニなど四季の訪れを舌で味わうことができます。また、一年を通じて新鮮魚介類の料理など当地でしか味わえないこ

だわりの味がたのしめると思いま。基幹産業は農業と着物業（丹後ちりめん）で、農業は水稲（コシヒカリ）主体の兼業農家が多く、昭和四十九年のオイルショック以降構造不況と着物離れで織物業者が激減し、農を核とした新しい産業づくりへの展開が模索されている状況であります。

このような状況の中、私は建設課の技術屋から産業振興課に替わり「人・物・産業づくり」を基本にした集落と町の活性化に向けた取り組みの仕事をしており、今回その活動の一端を紹介させていただきます。

## 住民組織の重要性

大宮町では大きな事業を実施する場合、ややもすると住民とのコンセンサスを充分得ないまま着手して、様々な問題が発生した経過があります。その結果いままでの事業の取り組み方ではいけないと気がつき町も従来の事業の進め方を改めることになりました。

そこで、地域住民が主体の地域の活性化を進めるため組織づくりの重要性を認識し、集落に足を運び組織づくりから始めました。

その手法は、各集落の代表である区長さんと呼びかけ、メンバー選びも地元にかかせて、まず五集落に村づくり委員会を組織しました。村づくり委員会では、住民主体による話し合いを基本とし、行政は「金はだすが口は出さない」の協役に徹して、まず住民手作りの集落活性化ビジョンを策定しました。その集落活性化ビジョンをベースにできるも

のから事業化し、集落の活性化を図っていくというもので、町には十六の集落があり、現在その内十二の集落に村づくり委員会が組織され、活性化に向けた取り組みが住民主体で元気に行われています。

## 人・物・産業づくり

村づくり委員会の活動は、農業問題だけではなく、商工観光・福祉・環境問題等にまで地域の課題を掘り下げて、それを克服する対策を検討し



じゅくじゅく塾の開催

てその対策を具体化するため  
の行動を起こしています。

具体的にはあじさいJAZZ  
コンサート・寺小屋塾・や  
まなみフェスタ・ふるさとの  
川を再び・じゅくじゅく塾な  
ど各種イベントを開催して人  
の元気づくりをまず進めてい  
ます。こういったイベントは  
行政主導ではなく、地域の村  
づくり委員会が主催し行政は  
裏方に徹しています。イベン  
トを開催することによって会  
員相互のコミュニケーション  
を図ることができスタッフの  
能力を向上させるなど元気な  
人づくりに役立っています。

また、高齢者や女性の活動  
場所を広げるため、地域が朝  
市の開催を計画し、農水省な  
どのソフト事業を活用して朝  
市グループを組織しました。  
朝市は一昨年の四月から開店  
し、現在参加者や品数も増え  
て活発な活動を展開していま  
す。この活動が他の集落にも  
波及効果を及ぼし、別の朝市  
開催へと展開しています。

別の集落では農協が広域合  
併することにより小さい支所  
の統廃合が行われ、お年寄り  
などが大変不便を感じるよう  
になりました。そこで、村づ  
くり委員会は廃止になった支  
所を借り受けて改修し、住民  
の有志による出資で農業生産  
法人を設立しました。農作業  
の受託や農産物の加工販売、  
都市住民との交流イベント開  
催などの事業を展開する集落  
活性化の拠点施設の整備まで  
行う組織として成長しており  
ます。現在(南)丹後路たにうち  
ファームと(南)常吉村営百貨店  
の二法人がこういった施設の  
運営管理を行い地域の雇用確  
保と新しい産業の開拓をして  
います。

更にこのような集落とは違  
う形の新しい農業の形態も生  
まれてきています。それは、  
国営農地開発によって里山が  
百ヘクタールの新しい大規模  
畑地に生まれ変わり、異業種  
から農業への若い転職者が現  
れ従来の農業と違う農業経営

を行うなど地域の住民が主人  
公の「人・物・産業づくり」  
が進んでおり、「面白い農業づ  
くり」から村が元気になり  
「住んで良かった村づくり」へ  
と変わりつつあります。

### 町づくりは人材交流から

大宮町では昭和六十一年に  
JOYという人材育成の組織  
ができ、全国の先進的な町の  
視察研修を行い、イベントな  
どの活動をする中で人づくり  
を進めてきました。地道な人  
材育成の歴史が人を育て、周  
囲も少しずつ意識改革が進み、  
今日の各集落で活躍している  
リーダーはそんな人づくり活  
動から育つてきています。

私の町づくりのコン  
セプトは、集落が元気  
になれば自然に町も元  
気になり、住んで良か  
った快適な町づくりが  
できるということです。  
最近人口も増加し、い  
ろんなユニークな能力  
の人が集まり住民主体

による町づくり運動が徐々に  
ではありますが進んでいるこ  
とを感じます。

現在の職場に変わってから  
三年間地域づくりに関わり感  
じたことは、地域に足を運ぶ  
ことをいとわず時には酒を酌  
み交わしお互いを理解するこ  
とと行政が黒子となって柔軟  
な頭で理解し物心両面で支援  
していくことが重要だと思い  
ます。そして、全国の様々な  
人と交流を持ちネットワーク  
を形成していくことが情報の  
受発信に繋がりが、町の活性化  
には不可欠であり、「舞たうん」  
を通じて交流が広がることを  
期待しています。



日本一元気な村づくり

# 『街の姿は心のかたち』

松山市

池之上 卓治

私が仲間たちと「四国バリアフリー研究会」を発売してから、早くも三年半が過ぎようとしています。バリアフリーとは障害を取り除くということ。老若男女を問わずすべての人を対象とし、家から街、交通機関などから制度や心の内面にいたるまで、人を取り巻くあらゆる事柄に及びます。作業療法士という仕事柄、特に障害者の皆さんや高齢者の方々から町中の不



便さや危険箇所が多いという話はよくお聞きしていました。誰もが安心して暮らせる街を実現したい、そんな思いから研究会は生まれ、シンポジウムや設計協力などの活動を展開してきました。

では、ちよっと街中を歩いてみましょう。広い道路には歩道が整備されています。その歩道は誰にでも歩き易くなっているでしょうか。バス停や駅もあります。バスや鉄道は子供やお年寄りの方に安全で乗りやすい構造でしょうか。スーパーマーケットに入ってみます。車椅子でも買物ができる店内ですか？お手洗いを覗いてみましょう。最近では車椅子用トイレや荷物を置くスペース、赤ちゃんのおむ

つが替えれる場所がある店舗が増えてきました。といった具合に街をちよっと見回しただけでも様々な障害が目につきます。今、ここに挙げたのは設備や構造などの物的な障害で、作り直しや追加などで改善できるものが殆どです。（もっともお金も必要とします）

しかし、本当に街の姿を決めるのは、そこに住む人たちの「心」ではないかと最近感じています。いくら歩道を作っても、そこに自転車やバイクが放置されていたのではどうでしょう。車椅子用駐車スペースのマークも心が盲目になっっている人には何も見えてはいないのでしょうか。町中の道路は簡単には拡がりません。その道を不法駐車やタクシーの列で占拠しているのは仕方のないこと？車から吸い殻やごみを道路に捨てる人は、自分の家の前で捨てられてもまさか文句は言わないでしょう。こんな例を挙げなくてはなら

ないのは本当に悲しいことです。街は生き物です。中に住む私たちが元気であれば街も活気づいてエネルギーにあふれます。でも、その反対ならどうなるか。そんな街の姿は想像したくありません。

今、街づくりは大きな別れ道に差し掛かっているような気がします。誰もが住みやすい街は確かに大切なことです。そのための法律や条例の制定も喜ばしいことだと思います。ですが、それを生かすも殺すも人次第なのです。仮に自分たちが他の街へ行ったらどうでしょう。近隣の街であればそれ程違いはないはずです。なのにその街から受ける印象が違うのはなぜでしょう。何がその違いを生んでいるのでしょうか。気候や風土、もちろんそれもあると思います。しかし、住む人たちの「心」が街に魂を吹き込む、そうは思いません。街の姿は心のかたち、それを考える今日この頃です。

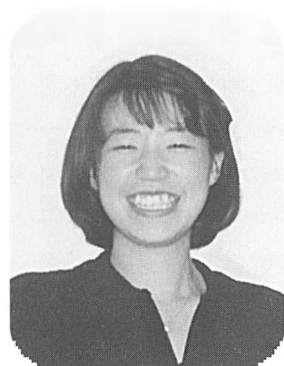


# 『思うこと』

松山市

野本 文枝

高校を卒業と同時に、就職の為松山に住むようになりました。あこがれと不安が一杯ありましたが、やはり、田舎で育ったせいでしょうか。田や畑の近くを通ったり、道端に咲く花を見つけたときは、ほっとしたりしました。最近では私が来た頃より、大分景色も変わり、田畑だった所には、分譲住宅が建ち並んでしまいました。西条Ⅱ川内、川内Ⅱ伊予間と、高速道路の開通をはじめ、主な幹線道路の



整備・改良、また、総合公園などの施設も、急スピードで進み、松山市全体が、増々活発化しています。アンケートなどでも、住みやすい街に「松山」があげられるそうです。実際、私も松山に来て八年半になります。私がよく目にし、そのことをすぐ感じるのは、道路や道端の溝はもちろん、人の家の塀や、マンション、施設の駐車場といったところに、空きカン、ビン、広告などの紙くずを、平気で捨てていく、ということです。

また、松山に来て、間もな

い頃、車の運転中に、いきなり目の前に飛んできた火のついたタバコ、ティッシュを丸めたもの等。これには、さすがの私も、怒りを覚えました。

人としてあたり前の「ゴミはゴミ箱へ」ということを知らないはずはないと思います。何故、人はあたり前のことが出来ないのでしょうか。子供の頃には、きちんと出来ていたことも、大人になるとできなくなる。その大きな原因は「自分一人ぐらい大丈夫」「誰かがするだろう」という、自分本意や他人まかせといった考え方をしてしまう心があるからだと思います。どんなに美化運動をしたり、新しいルールを作ったとしても、一人ひとりの気持ちが変わらなければ何にもならないと思います。市や県でも、いろんな考えや取り組みを、市民の皆にわかりやすく伝え、意識をもっていただける様に呼び掛けることは、とても重要です。

あるCMで、ごみを道路や

他人の自転車籠に入れている大人に対して、少年が、「自分の家の前にでもゴミを捨てるのかな」「町はゴミ箱じゃない!!」というのを見たとき、私は、心の底から改めて「本当にそうだ」と思いました。少しでも、他人の事を考え、相手の立場になって物事を考えてみれば、絶対にやれるはずがないと思います。

ポイ捨てをしないということとは小さなことかもしれませんが、この小さなことに心を遣っていければ、幅広い意味で、現在のあらゆる社会問題も、解決できると実感します。

一人ひとりが、他人を思いやる優しさの自覚と行動の積み重ねによって、より住みやすい地域へと変えていけるのではないのでしょうか。

## —まちづくりグループ紹介—

### “篠山クラブ”

事務局長

田中 俊二

土佐と伊予仲良く飲もうや

一本松町には、足摺宇和海国立公園「篠山」があり、四月下旬から五月上旬にかけて、花びらがピンク色をした「あけぼのつつじ」や「しゃくなげ」の群生がある。

篠山の南側から湧きでる水が、「篠川」となって、その川を境に向う側が、高知県宿毛市山北地区、こちら側が、愛媛県南宇和郡一本松町正木地

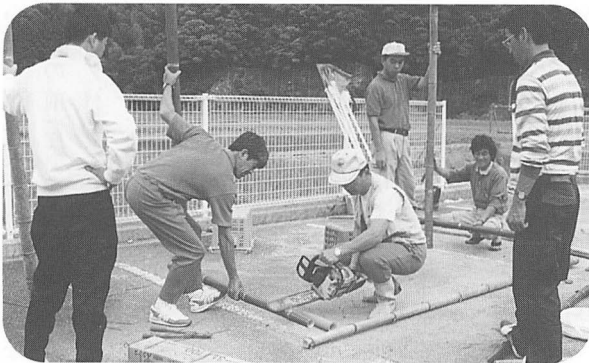


区となっており、両地区合わせて、篠山の南側に位置することから、「篠南地区」と呼んでいる。地区（五六〇名）の三十才代から四十才代までの男性三十五名で組織しているのが、「篠山クラブ」で、県を越えて、お互いに協力しあうことを目的に、昭和五十年に結成された。

当初は、「だすい束」の状態で活動をしよう。つまり、束が外れそうで外れない、束を立てると傾くが倒れない、これくらいのやわらかい規約で、酒を飲む会としてスタートしたそうだ。

山ん中へ人を引っ張ろうや

保育園児たちに友情と夢を



サッカーゴールも手づくりだよ！

見せようと、十七年前から、愛媛県側から高知県側へ二百メートルのワイヤーロープを二本渡し、二百五十匹の鯉のぼり渡しを行なったり、太刀や鎌、鎧を着用し、四百年以上続いている花取り踊りの伝承、牛鬼や五鹿踊りなどの秋祭りや盆踊りなど、地区内の全ての行事を行なっていた。そのような中、従来の行事を消化するだけではおもしろくない。

『みんなで燃えるような感動するものをつくろう、自然に恵まれた県境の地域をアピールしよう』と、地元有志や公民館主事が一ヶ月間、毎晩集まり、飲み食いしゃべりまくった結果が、平成三年にスタートした「篠山騒動どろんこサッカー大会」だ。

今回は、この大会を中心にしたコミュニケーション活動についてご報告したいと思う。

泥田の中で、V6といっしょに

「WAになっておどろう」

昨年九月二十八日に、「第七回篠山騒動どろんこサッカー大会」が開催され、人気アイドルのV6も参加した。事前に広報していなかったにもかかわらず、二千人以上の人々が賑わった。

泥田の中で選手は、ぬかみに足を取られ、ふざけて踊るように走り回り、飛び散る泥に観客も悲鳴をあげて逃げまどう、それを追い掛けるアマチュアカメラマンたち。



朝5時に集合して…おにぎりづくり（婦人会）

に、まっ赤な衣装で、体に張り付いた泥もいとわず、動きも軽やかで多くのカメラマンの目を楽しませていた。

この大会は、婦人会や保育園母親クラブ、PTA、消防団など地元の人たちの「地域の活性化につなげたい」という熱い思いによって成り立っている。

稲刈り後の田に水を溜め、長さ三〇m、幅十五mのコートをつくり、どろどろにした状態でミニソフトバレーのボールを五人で五分間蹴り、難しいルールはないが、ゴールキーパーも手を使わず、顔や体で防ぐ事になっている。

コートは、トラクターで田んぼを耕し、水が漏れないように「あぜとり」という作業が必要となる。この作業は泥を寄せ畝で堤防のように作るわけだが、なかなかうまくいかない。そこで、農業のプロの登場となる。

表彰板も八十年以上の「桜」、お楽しみ抽選会の抽選券は、

「檜」のコースターで、林業のプロたちが仕上げてくれる。

食事は、婦人会によるおにぎりや、地元で捕れた猪肉をふんだんに使ったうどんなど。

運営資金は、寄付ばかりに頼らず山の草刈りを請け負って調達。

このように地区全体が「篠山騒動」となり、平成八年三月には、ふるさと愛媛創造賞となった。

これからはどうしようかな

農山村に住むことで喜び、安らぎを感じることが出来る環境をつくるために、このイベントを通して取り組んでいきたいの思いも、会員の入退移動によって、薄らいでいることも感じられる。

そのために、恒に当初の思いを伝えることやイベントの新鮮さを保つ難しさを味わっている。

今後は、若い力のみなぎる後継者づくりと、地

域の味を知っている先輩たちに頼りながら、活躍の場を共に探していくことが課題だと思う。

いろいろと厳しい状況の中、誰もが泥だらけ汗まみれになつて笑うことができる、どんなサッカー大会を続けることによって、「嫁さんがきたくなる」住み良い地区づくりに向けて、今後も取り組んでいきたいと考えている。



男女の差なんて関係ないわよ！泥にまみれてハッスル！

私が町おこし活動に関心を  
持つようになったのは、教育  
委員会社会教育担当であった



二十年前に遡る。

「地域づくりは人づくり」  
の理念に基づき、生涯 学習や  
さまざまな社会参加活動を住  
民と共に歩んできたことが懐  
かしく思い起こされる。

当時、県下でもめずらしい  
「成人大学」に着手していた。  
この学習会は、婦人会に相對  
しての中年男性を対象に開設  
したものである。男性中心の  
学級が誕生し、一年経過して  
自主運営が軌道にのった頃、  
私は人事異動により、教育委  
員会から行政部局へと席替わ  
りとなった。

その年度末に、(財)愛媛県ま  
ちづくり総合センターから私  
を訪ねて、「町おこしに関心  
のある人を集めて、活動を始  
めてみませんか？」と言う。そ  
んな話を持ち掛けられるとじ  
っとして居られない私。

そこで、地域づくり、町お  
こしは、中年男性の心意気が  
是非欲しいと思ひ着眼したの  
が「玉川町成人大学生」への  
誘いである。まだ学級生とは

顔馴染みであったので年度末  
最後の学習会の時、説明させ  
て頂いた。町広報紙や各種会  
合でも紹介し募集したところ、  
男女十五名の賛同を得た。



「ふるさとコンサルティング事業」にてフォーラム開催

愛媛県まちづくり総合セン  
ターからの委託「ふるさとコ  
ンサルティング事業」を受け  
入れ、県内アドバイザーに双  
海町の若松氏、県外アドバイ  
ザーには大分県大山町の緒方  
氏に担当して頂き、町の診断、  
研究をお願いした。

## 町おこし はじめの一步

まず、「自ら考え、自ら行動  
できる住民集団の育成」のた  
め、町おこしとは何か？につ  
いて定例会や視察研修をし  
て学ぶ一年とした。

地域づくりグループ「源流」  
が歩みはじめたのである。

二年目には、前年の町内巡  
りから名所旧跡地や隠れた文  
化財等二十ヶ所余りに、大き  
な案内版を設置した。

三年目には、町の特産であ  
る竹を生かして「竹炭づくり」  
に精を出す。会員も年々増え、  
「竹炭と液」が商品化され、  
現在好評発売中である。



「源流」会員と町内視察巡り

## 女性ならではの活動を

ちょうどこの年、県地方局から「生活文化女性塾」開設の話があった。「源流」会員さんにお断りして女性の地域づくりグループの育成に挑戦することにした。グループ名は「女性塾たまがわ」とし、「女性の視点を活かしての地域づくり」という実践課題で、知恵と汗を流しての活動を主眼にしている。年度末には、町政に対しての提言をさせて頂いている。

そんな中、姉妹縁組みしている埼玉県玉川村商工会婦人部十五名から女性塾との交流申込みがあり、一泊二日の交流学習会を行った。これが機となり、翌年は、「女性塾たまがわ」十三名が、埼玉県玉川村を訪問し、親善を深めた。このことは、女性にとつて大きな励みとなった。現在「男女が共に輝いてぬくもりのある地域づくり」をスローガンに掲げ、企画、立案、実践に

励んでいる。

## 住民の声を町政に

行政マンとして思うことがある。役場職員として、その責務を全うせねばならないことは、当然のことであるが、ただ一筋に町職員として勤務するのではなく、職場を離れると一人の住民であることを頭の隅に置き、そこに住む地域住民のニーズや考え方を捉え、それらを町政に繋いでいくことも大切ではなからうかと思うのである。

そんな思いもあって、地域づくり、町おこしについて考えるグループ活動への参画は、私から切り離すことができない現象でもある。

現在、住民福祉課の担当の一つでもある老人クラブ事務局を預かっている。わが町の今までの老人クラブは、男性役員のみで構成されておりながらも、女性会員が多くいろいろな活動に参加していることに思いを寄せ、昨年は女性

幹部役員を選出、今年は、各支部から女性役員を選出し、総会にて規約改正およびこれらの承認を得て女性部発足。役員名簿に男女が肩を並べることができ、その女性部役員のよびかけにより、単位老人クラブでの集いや社会奉仕など活性化の動きが見られるようになってきた。

## チャレンジ精神で

人は言う。「あんたは、次から次へと新しい風を起こす人だね。」と。

女性の特性を生かしての町づくりを微力ながらすすめていきたい。

女性が輝く町づくりから誰もが輝く町づくりへのすすめは、自分一人からでも輝くことから始まる。そのためには、何事にも一生懸命取り組み、人と人との交わりにより、切磋琢磨して自分育てをすること。

我が町について、誇れることができる町おこしに挑戦。誇れることがいくつあるかな。



女性塾「たまがわ」主催の講演会





## — 研究員レポート —

“えっ！ 紙でこいのぼり？”

研究員 稲田 紹

### いざ高知へ

メロディー付きの目覚時計が心地良い眠りについていた私の鼓膜を揺さぶったのは午前七時。天気も上々だ。

軽く朝食を済ませ、身支度を整え待ち合わせ場所へバイクを走らせた。少し早過ぎたかなと、あたりを見回して見

ると、穴が開くかと思う位、新聞を見つめている一人の男がいた。職場仲間のI氏である。一通り読みおえた彼の顔には満足気な笑みがこぼれていた。きつといい情報を手に入れたのに違いない。

二人は、本来の集合場所であるJR松山駅前に向かって足を進めた。

ということとで今回の視察研修は、県の「西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業」の第一班として昨年十一月七日、八日と高知県伊野町へ参加させていただきました。

ここ伊野町は、高知市に隣接した人口二万五千人程の町です。東西に細長く伸びており高知県の縮図のような地形です。

企画財政課長曰く、この市町村でも見られる現象ですが、中心部と山間部の人口差が極端で、また高知市に近い（高知市役所から車で約二十分）こともあり、「都市部の空洞化」になりつつあるそうで

す。主な産業は、製造業が中心で全体の八〇%がパルプ関係の仕事だそうです。この町が伝統ある和紙を使って、どのようなまちづくりの取り組みを行なっているのか。私が是非とも伺ってみたかった

“マチ”の一つだったのです。ゆつたりした大型バスに揺られて、いざ高知へ。片道約三時間の旅は結構長いものです。私は、なんとか時間を潰そうと移り行く景色をボンヤリ眺めていました。目に映る山々の紅葉は、キャンバスに描いた絵のようにとっても芸術的です。

「稲田さん、あれスゴイなあ？」I氏が私に話しかけました。視線をそこに移すと、川の中から噴き出す噴水が目

かしこの穏やかな川のどこからこんな大量の大きな石が？ そんなこんなで、疑問を抱いたまま目的地である伊野町に到着しました。

### かみスキです♡

午後一時から少し緊張ぎみの課長による町の概要やまちづくりに対する取り組み等を研修した後、いよいよ町内の施設見学です。和紙の情報発信基地である土佐和紙伝統産業会館（通称…紙の博物館）



手すき（スキ？）体験



では足が棒になると思う位熱く語る館長……。

施設で私が一番目を引いたのは、ガラスケースの中にある全てが和紙で作られた「小さな町」です。江戸時代だと思われる情景には、風情があり、人形たちの表情にも和紙独特の心をホッとさせるものがありました。

紙の博物館から国道一九四号線を車で十分程西へ行った所に、土佐和紙工芸村「くらうど」があります。町内外から応募してきた紙漉き職人後継者の研修場所でもあります。

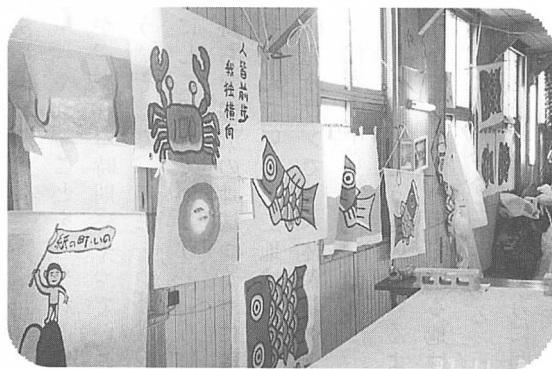
担当者からの「紙漉きやってみます？」の言葉に参加者の顔はほころんでいました。おそらく紙漉き経験の無い人たちがばかりです。まずは、係の人から「漉き方」を教えていただくことにしました。見た感じとても簡単そうです。そこで、私も腕まくりをし、教えていただいた通り力を込めて、一気に手前に漉き上げました。間髪入れず、水分が

なくなる前に、ゆさゆさ揺すって形を整えなければなりません。あとは好みに応じて野草や花などを加えて出来上がりです。自分の作品を見る参加者の顔には、満足感が漂っていました。

### マチヅクリない関係

一夜明けて、まちづくりグループ「こいのぼりくらぶ」のメンバーに会うため工房を訪ねました。木造づくりの旧郵便局だというこの工房に入った途端、まるで縫製工場のように山積みされた紙の束に圧倒され、床にはペンキが・・・、壁は紙で作った派手やかなこいのぼりたちがずらり、落款には「も」の文字が。…なんだろう???

工房は年中無休。しかも二十四時間使用が可能でメンバーは三人（うち女性一人）、個性的な人が集まったこのクラブ。中でも紙のこいのぼりの発案者であるというMさんには圧倒されっぱなしでした。



かべにも紙のこいのぼり

そうです。

毎年、ゴールデンウィークの仁淀川に百匹程の紙のこいのぼりが泳ぐ様は、それは豪快な眺めだろうと思います。

Mさんを初めメンバーの方たちの淡々と熱く語る横顔には、和紙へのこだわりが、また、伊野町を愛する想いが表れていました。

たまたまのひらめきで作った「紙のこいのぼり」これほど町の活性化につながるとは誰も気付かなかつただろうと思います。

### こんなところ!!

中身の濃い研修を終えて、一週間後、たまたま番号で止まったあるビルのウインドウに「も」の字の入った派手な紙のこいのぼり（どっかで見たような）が。なんとこんなところにあるとは。Mさんも「すみ」に置けませんね！



## — 研究員レポート — 「地域に生きるということ」

— 最近心に残った言葉から —

主任研究員 藤田 享

### かめのように走る

「皆さんは、『うさぎとかめの話』の新しい解釈をご存知ですか。うさぎは、かめを見て走ったが、かめは、ゴールだけ見て走ったというものです。これからの地域づくりには、こうした価値観が必要ではないか」（河辺村でのふるさ

とづくり文化講演会で、世界陸上の女子マラソンで四位に入賞した飛瀬選手の談話を引いて、広島大学の土井俊樹氏）  
まわりのことはあまり気にせず、時間はかかっても、目標に向かって、一歩ずつ進んでいく。ころんでもくじけずに立ち上がって走ることだ。そうすれば、結果は自然についてくるということだろう。

### やれることを

#### やれる者が

#### やれるときに

ところで、地域づくりにゴール（終点）はあるのだろうか。どうもなさそうである。

したがって、とりあえずの目標は、自分が住んでいる地域を少しでもよくしよう。そして、次の世代につないでいくということになる。

すると、イメージとしては、駅伝に近いように思う。自分のペースでしっかり走って、次の走者にタスキを渡していく。評価は、後の世代の人が

決めてくれる。

「やれることを、やれる者が、やれる時期にやっていく。そして、年に一つは、形に残していこうという気持ちで柳沢の地域づくりに取り組んでいる。」（地域づくり研究サロンで、木林森夢クラブ代表の平谷和生氏）

しかし、こう言い切れるような、うまくいっている地域は、どうも少なそうである。

それは、内と外、双方に問題があるからであろう。

### 百人の一步より一人の百歩

たしかに、「ここはこんなもんよ。ワシらの代までよ」というアキラメが蔓延している地域が、多いように思う。

それを突き破るには、「百人の一步を待っていたんでは、いつまでたっても地域は変わらない。私は百人の一步より一人の百歩という気持ちでやってきた」（地域づくりコーディネーター中国四国ブロック情報交換会で、カソサカ創始

者の和田芳治氏）という人が出てこなければならぬ。

「まちづくりのリーダーとなる条件として、〇〇町を自分が背負っていかなければならないという気持ち、バイタリティは絶対必要。そして、そのベースとなるのはハングリーさだ。」（えひめ地域づくり研究会十周年記念座談会で、岡田文淑氏）にも、同じ思いが感じられる。

### 変えてはいけないこと

#### 変わらないといけないこと

しかし、「地域には変わらないといけないことと変えてはいけないことがあるが、変わらないといけないことをそのままにして、変えてはいけないことを変えてしまっていることが多い」（えひめ地域づくり研究会十周年記念座談会で、若松進一氏）という環境の中で、変わらないといけないことに手をつけたり、変えてはいけないことを守ろうとすると、当然軋轢が起る。

だが、「人に足を引っ張られるようになったらまちづくりも一人前。単なる美化活動のように、みんなにいいことをしていると思われるうちには、まだ本当のまちづくりではない。」（前出、和田芳治氏）ということのようである。

それをクリアしていくには、「やはり経済だ」「自分が楽しむことだ」といったアドバイスがある。

### 過疎で、誰が

困っているというのか？

そして、外からの問題は、地域を見る人の無理解である。

「過疎で困っているという話を私は住民から直接聞いたことがない。困った困ったと言っているのは、町村長や議員だけではないのか。」（ある会議で、ある県の地域づくり担当者）

私は一瞬耳を疑ったが、どうも空耳ではなかったようである。

東京あたりの世間を知らない

い人の口からならともかく地域づくりの担当者の口から出ると、「それを言っちゃあおしまいよ」である。

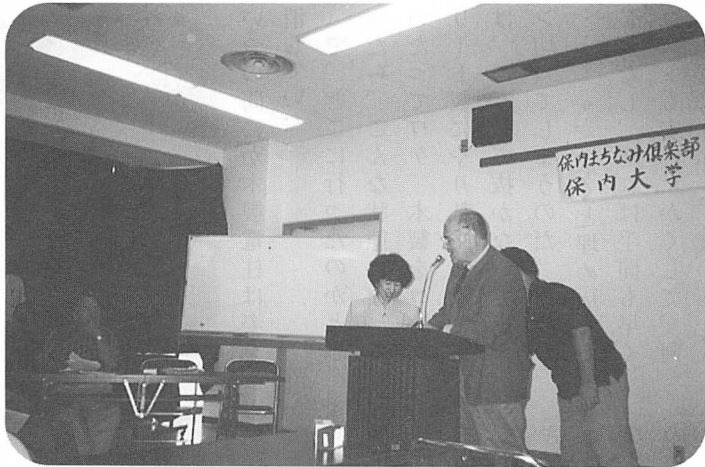
しかし、松山あたりでも、地域が崩壊していくことに対する危機感を感じていない人が、結構多そうに思われるのは、コワイことである。

現に、この夏、わがセンタ―を訪れた女子大生は「どうしてみんな、そんなにふるさとにこだわるのでしょうか。むりやり消防団や青年団に入られて、自分の時間も自由にできなくて、なんでそこまでしてふるさとに住まなければならぬのでしょうか」とのたまわれたそう。

### 自分の足と目で

たしかに、「今の教育は、いい大学、いい会社に入れるよう努力をさせて、ふるさとを捨てさせる教育をしているんじゃないかと思えない」（前出、和田芳治氏）状況の中で、地域では、依然として都会志向、便利志

向が強く、「田舎が最先端」という感覚を持っている人は、まだまだ少ない。



かと感じているところである。そのためには、「私が県立劇場を引き受けて最初にしたことは、熊本県下の町村まわりであった。半年かけて、自分の足で歩いて、自分の目で見てみた。地方公務員は文書主義から現場主義に転換しなければならぬ。」（全国先進事例会議 in 北九州で、鈴木健二氏）という言葉

を引くまでもなく、もつと地域に出なければ、何もはじまらない。

県内にも、無茶々園の片山さんやODAの木協会の高本さんのように、いい顔をした人がいっぱいいるし、まだまだ知らない地域資源がいっぱい埋もれているはずだ。

当面の目標はこれだ！と思ったところで、ちょうど年が明けた。

地域で現に頑張っている人にスポットをあてることにより、地域の内外にあるミゾを少しでも埋める手助けをすることが、地域に住めるだけの知恵も、器用さも持ち合わせなかった私の務めではない

# “MY TOWN” “うおっちゃんく”

## 歩キ目デス&足ラテス



第二弾

岡崎 直司

ごあいさつ

今回も前回に引き続き、目玉は大層忙しい。この講座を受講の方々、頑張ってくれたまえ

誰かが言った、町はワンダ  
ーランドである。町には色んなものがごろがっている。折角あるそれらを、見す見す見すごすのは勿体ない。第二回

講座も十二分に楽しもう。  
我が教室はフィールドにあり、早速まちへ。

### “電柱の切り株”

ムムツ、これはナンダ。路上に出っぱった異様なヤツ、白状せい！と、まあいきなり攻めかかっても相手だつて面喰らう。じっくり観察といきましよう。見る、視る、観る。

そう、察しのいい人はもう合点がいつていることだろう。「電柱の切り株」です。

これがしかし、それぞれの観察者の反応が面白い。年齢が若過ぎてピンと来ない人。また、年配者でも頭が固まってなかなか閃かない人、アナタはどちら？

電信柱は、昔木で出来ていた。当たり前と言えば当たり前だが、これがアータ、世代によっては当たり前ではないのだ。コンクリートの電柱しか知らない世代が出来つつある。確かに、町を見渡すと、

いつの間にか木製電柱は姿を消していた。

で、どこに行ったのかと思つたら、こんな状態になっていたつてワケ。木製をコンクリート製にやり替える際、実は、こうして抜かないでチョン切ってしまうのだ。何故か……？。抜くと埋め戻しが必要だし、切れば手間も早くコストも安い。かくして、阿部定電柱の出来上がり。あ、コレ電柱の切り株の別名。阿部定については、若い人は年配者にお聞きあれ。

### “ビクター犬”

では、お次、②の写真。ご存知“ビクター犬”。

これも、町を注意して歩いていると、何匹かは見つかります。路上にあつては得難いキャラクターです。何てつたつて表情がいい。このどことなく淋しげな、うつ向き加減の独特のポーズ。

実は、調べてみると、コイツは訳ありの犬でした。ビクターの商標という認識は、多くの方があられるかも知れません。



犬の名前は、ニッパ、イギリスのフォックス・テリア犬です。フランシス・バラウドという画家が、亡くなった兄の愛育していたこの犬を飼うことになり、その時のエピソード。

ある時、かつて吹き込まれた兄のレコードをかけたところ、その蓄音機(注)のそばで、ニッパはげんそうに耳を傾けていた。懐かしい主人の声に聞き入るその姿に感動し、バラウドの描いた絵が、あの



蓄音機と共に小首をかしげて座るニッパ、という構図となった。

ヒズ・マスターズ・ボイス、可憐なニッパの姿は、ピクターの前身、英国蓄音機会社の人々を感動させ、バラウドの名画がそのまま商標となった、との事。

いやはや、奥の深い話です。私は単に自閉症ぎみの犬、くらいに思っていた。もう、ビクリシター。あー苦しい。

## “ワイパー”

次に写真③。

これは芸術かも知れません。因に、このギョーカイでは、ワイパーと呼んでいます。比較的見つけ易い物件でありまして、コツは平坦地より傾斜地で見える通り、コンクリートよう

壁に、よく描かれています。植物と人工物の間の、微妙な相関関係の中で誕生する芸術。仲を取り持つのは風。赤瀬川原平さん流に言くと、超芸術、ということになります。ハイ、今日はここまで。

(注)蓄音機(CDより以前、レコード盤から音を出す為の器具。ラッパ状の音声機が特徴)





# 『波方町立図書館』

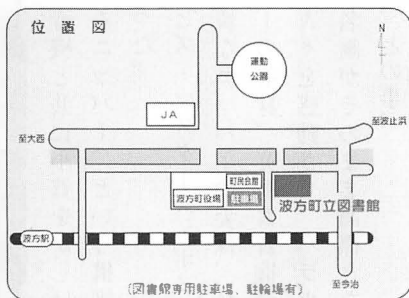
オープン

波 方 町

〈問い合わせ先〉

月曜日、毎月末日、国民の祝日、  
年末年始

☎（〇八九八）四一―五八八八



町民会館の東側に待望の町立図書館がオープンしました。都会的な外観をもつモダンな建物で、子供から高齢者の方までが気軽に利用していただくため児童・ヤング・一般の各図書コーナーをはじめ、海運の町にふさわしい海運船舶コーナーや、若者に人気のあるオーディオ・ビジュアルコーナー等が配置されています。

〈開館時間〉

午前九時～午後五時

〈休館日〉

# 道の駅

『みしょうMIC』

オープン

御 荘 町

国道五十六号沿いでは初めての道の駅「みしょうMIC」が（愛媛県内では九番目）このほどオープンしました。

二十四時間利用できる公衆トイレの身障者用・女性用には幼児対応の多目的ブースを整備しています。

魚介類売場・青空市場では、宇和海の新鮮な海の幸・地元産の新鮮な野菜や果物の販売をしております。地元材料を活かした手づくりアイス・シャーベットも好評です。

ぜひお立ち寄りください。

〈開館時間〉

午前九時～午後六時



〈休館日〉

水曜日・

年末年始

〈問い合わせ先〉

☎（〇八九五）七二―二二五





# 「えひめ地域づくり研究会議」'97年度フォーラム開催

## テーマ『ローカルに生きる』

— 四国遍路文化に学ぶ —

- と き 平成10年1月24日(土)  
 ■ところ 仙遊寺(越智郡玉川町四国霊場58番札所)  
 ■プログラム 12:30~ 受付  
 13:00~ 開会  
 13:30~ 基調対談「癒しと遍路」  
 堀内 統義(日本現代詩人会会員)  
 森原 直子( )  
 15:15~ 分科会

- ①交流が育てる地域  
 提言者:岡田 文淑(内子町)  
 ②遍路に見る癒しの地域づくり  
 提言者:小山田 憲正(仙遊寺住職)  
 ③歩き目デスと遍路みち  
 提言者:岡崎 直司(地域ウォッチャー)

18:00~ 交流会

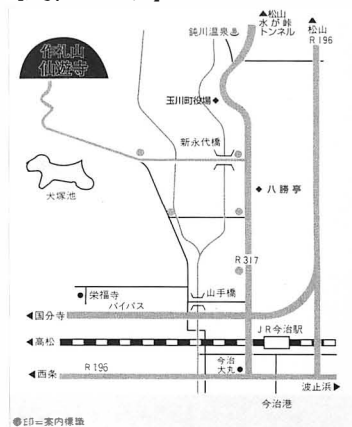
20:00 閉会

- 主 催 えひめ地域づくり研究会議・(財)愛媛県まちづくり総合センター  
 ■参加費 フォーラム 2,000円 交流会 5,000円  
 ■特別企画 体験「歩き遍路」フォーラム翌日1月25日(日) 9:00頃~  
 ■その他 詳細についての問い合わせ、申し込みなどは

「えひめ地域づくり研究会議」事務局 伊手まで

☎089(932)7750 (財)愛媛県まちづくり総合センター内

【仙遊寺へのご案内】



## BOOK INFORMATION

### ●まちのデザイン

歩き目デスは見た!

岡崎 直司 著

A5版変型版 1,600円(税別)  
 創風社出版

当「舞たうん」に好評連載中『MY TOWN うおっちゃんぐ』の執筆者 岡崎さんが、生まれ故郷の八幡浜を素材に書き下ろした待望のウォッチングの実践案内書です。

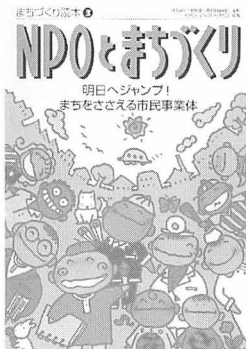


### ●NPOとまちづくり

林 泰義ほか 著

A4版 1,400円(税別)  
 風土社

まちづくりワークショップの第一人者 林泰義さんを中心とする研究会が、まちづくりの新しいキーワードであるNPOの意味や重要性について、全国の先進事例を紹介しながらまとめられた本です。



# 明けましておめでとうございます

新年早々、3択問題です。

“まちセン”のある場所は、次のうちどこ？

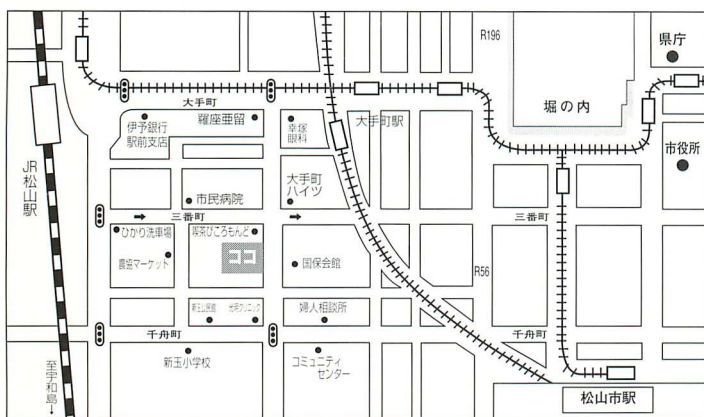
- ①県民文化会館横の旧農業試験場ビルの中
- ②県庁の中
- ③三番町8丁目の県生活保健ビルの中

もちろん正解は、③です。（参考までに平成3年11月までは①でした）

でも、こういう質問を、この4月からだけでも、何十回も受けました。意外にも知られていない“まちセン”の場所。

今、“まちセン”は、JR松山駅前から徒歩5分弱にある愛媛県生活保健ビル（衛生研究所などが入っているビルです。）の3階にあります。

外見は決してきれいとは言えませんが、駐車場もそれなりにありますので、皆さんお気軽にお立ち寄りください。



冬だというのにポカポカ陽気、相変わらずの暖冬です。早く早くと雪を恋しく思っているのは私だけでしょか。

さて、二十一世紀まであとわずか、今年も皆さんにとって良い年でありますように。そして、あなたの住んでいるまちが、もっともつとすてきに輝きますように。

本年もよろしく願ひいたします。

\*\*\*\*\*

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

『舞たうん』編集係まで  
〒790 松山市三番町八丁目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL ● 89 (932) 7750

FAX 089 (932) 7760

発行 平成十年一月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会